7月27日　下宿公園

大人が整え、子どもが楽しむ町・荒牧

荒牧町だより
第２０６号
荒牧町自治会
広報委員会

子どもでいっぱいのステージ

早朝のやぐら作り

去る２７日（土）台風６号の影響が心配されるなか、納涼祭が開催され、大勢の町民の皆様の参加により、盛会のうちに終えることができました。当日は勢多農林高校郷土芸能部《勢凛》による和太鼓の演奏や子どもたちによるパプリカのダンスが新たに加わり、大いに盛り上がりました。これもひとえに多額のお祝い金を提供下さった事務所、町民の皆様、また準備や運営、後片付けにご協力頂いた関係者の皆様のご協力の賜物です。改めて感謝申し上げます。大変ありがとうございました。

自治会長　　笛田　浩行

踊り係

はな係

進行係

焼きそば係

作品大募集！ 荒牧町文化発表会

今年も荒牧町の文化発表会を、１１月１６日（土）に開催することになりました。そこで、町民のみなさんが日頃から取り組んでいる文化作品を募集します。

☆ステージ発表 ➡ 踊り、ダンス、カラオケ、手品、演芸、各種演奏、各種パフォーマンスなど

☆作品発表 ➡ 絵画、書道、手工芸、写真、陶芸、短歌、俳句、彫刻、園芸、創造作品、など

子ども育成会にも出品をお願いしています。また、趣味活動、サークル活動、創作活動などをしている皆さん、この機会に互いの作品を見せ合い、文化を通したふれあいを楽しんでみませんか？

募集要項の詳細は次号の『荒牧町だより』でご案内をいたします。よろしくお願いします。

★自治会事務所のお盆休みは
13日(火)～15日(木)の間になります。

ペットボトルロケットを飛ばそう！

冒険遊び場参加者募集（申込みは育成会へ）

8月31日（土）10時～田口町ホタルの里近く

ここ、どこ？

この欄では、町内の気になる場所の写真を紹介していきます。さて、どこだかわかりますか？

（６）

下宿にある広瀬川東岸沿いの遊歩道。町民の皆さんが散歩を楽しんでいます。

まちかど探検《no.50》

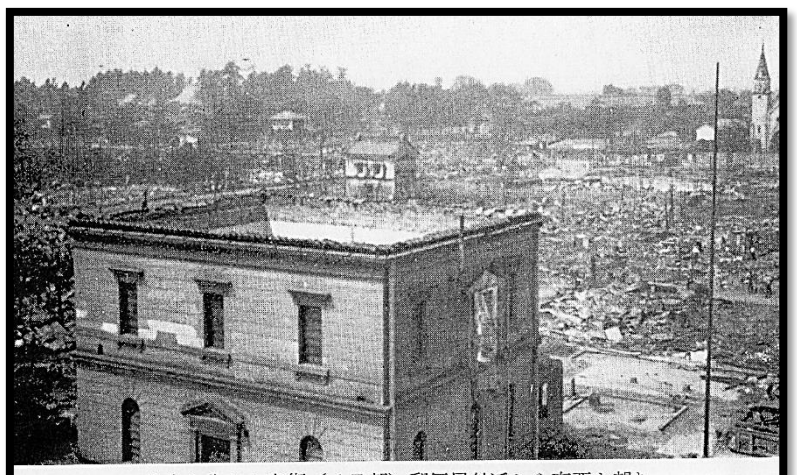
前橋大空襲と荒牧町

１９４５（昭和２０）年7月２６日　太平洋戦争終結の２１日前、連合軍（主としてアメリカ）は我が国に対し、無条件降伏の「ポツダム宣言」を勧告した。

これに対し、時の政府は敗戦が最早決定的にも拘わらず全く無視してしまった。この代償はあまりにも悲惨であった。２０年８月６日広島市に人類最初の原爆が投下され２０万余の人命が一瞬に失われ、続いて３日後の８月９日長崎に投下され、１５万余の人命が失われてしまったのは結果として痛恨の極みであった。しかもこの原爆の投下に先立って８月５日夜半、我が前橋市がアメリカ軍最大の爆撃機Ｂ２９による猛爆を受けたのである。

市立図書館の資料によると、「昭和２０年８月５日午後１０時３０分頃マリアナ群島ティニアン北飛行場を飛び立った９２機のＢ２９は前橋上空に飛来した。この編隊機から次々と焼夷弾が投下された。現在の前橋市立第３中学校の校庭から旧共愛学園にかけて最初に火を吹いた。やがて市の中心部も猛火に包まれ、全市火の海と化した。第一弾が投下されて１時間１５分、焼夷弾と爆弾によって市街地の約８割が焦土と化してしまった。この間の事はアメリカ軍の資料によると、投下されたのは焼夷弾１８万４千発、１５０キロ爆弾８７１発、これに加えグラマン艦載機による凄まじい機銃掃射などにより、死者５３５名、負傷者６００名以上、全焼１万１４６０戸、半焼５８戸という被害であった。」こうした爆撃の中、半分は死を覚悟し命からがら逃げ延びた話しがある。

当時、現在の住吉町に住み、小学校６年生であった町内の一女性は「あっという間に周りが火の海となった。身を焦がすような炎をかいくぐり勢多農林高校の前から桂萱方面に逃げた。この間には頭のない死体や焼けただれた子供の死体に取りすがって泣き叫ぶ母親の横をただただ死に物狂いで走った。将にこの世の生き地獄であった」と涙を浮かべ当時の思い出を語った。



焦土と化した市街（６日朝）郵便局付近から南西を望む
（右手は南曲輪町の天主公教会、その左は桃井学校）

また現在の群馬銀行竪町支店横に住んでいた当時５歳であった荒牧団地の一男性は「母に背負われて広瀬川の方に姉と一緒に逃げた。後に姉の話しによると、家から５００メートルほど逃げたとき、広瀬川の向う岸に物凄い地響きと共に爆弾が炸裂し母は私を背負ったまま伏せ、その上に姉が布団をかぶって覆いかぶさった。辺り一面火の海となった中、姉はその時は殆ど動けなかったが母は猛然と立ち上がった。しかしその母は左頬から血が流れ、モンペは大きく裂けていた。母は私を背負ったまま道路沿いの側溝の中に転がり込んだ。姉はその時の母の姿を見たのが最後であったと語った。私は誰かによって、かすり傷一つなく助け出された。姉の両足は爆風により大きい傷口が開いていた。」当時の記憶をまるで御自身が経験したようにたどって話して頂いた。

いま一つ驚いたことは、下宿のはずれにある大きな農家の一主婦が語ったことである。「８月５日市街地が炎に包まれるにつれ、荒牧町にも次第に逃げてきた人の数が増し、私の家の中も気が付いた時、中は土間から居間まで人で溢れており、足の踏み場もなかった。しかし、東の空が明るくなるにつれ、一人去り又一人家からいなくなっていった。」

直接荒牧町は特に被害はなかったが、矢張りそれぞれに当時の傷跡は残っていた。　　（赤松）